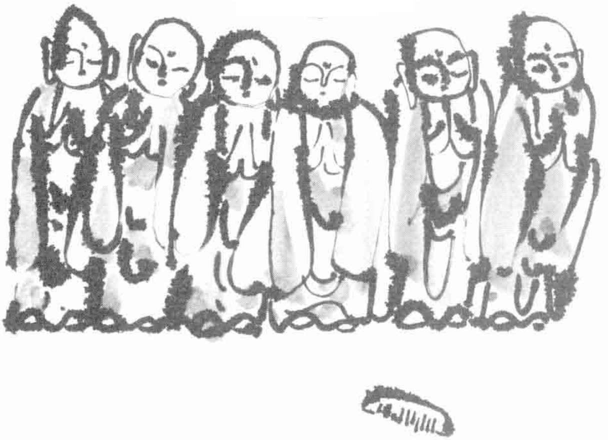
はなれ瞽女（ごぜ）おりん

水上 勉

はなれ瞽女（ごぜ）おりん

水上　勉



新潮社版

はなれ瞽女（ごぜ）おりん　八〇〇円

昭和五十年九月二十五日　発行
昭和五十二年七月三十日　五刷

著者　水上（みなかみ）勉（つとむ）

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社新潮社
郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部（〇三）二六六―五一一一
　　　編集部（〇三）二六六―五四一一
振替　東京四―八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社金羊社　　製本・大口製本株式会社
© Tsutomu Minakami 1975　Printed in Japan

作品集『はなれ瞽女おりん』目次

はなれ瞽女おりん……7
阿弥陀の前……147
しゃかしゃかその他……169

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

草民記一章……181
鯉とり文左……203

装幀　横手由男

はなれ瞽女おりん

はなれ瞽女おりん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

はなれ瞽女おりんのことを書く。

その前に、瞽女のこと、ならびにはなれ瞽女という呼び名について説明しておく。瞽女とはひと口に云って、盲目の女旅芸人のことをいう。

彼女たちは、仲間をつくって一定の住居に集団生活をなし、時期をきめて旅に出た。ゆく先は、諸方にある瞽女宿であるが、そこで寝泊りするのに、持参した三味線を奏で、瞽女唄といわれる説教節に似た語りもの、時には時事小唄、その地方の古謡などをうたって、あつまった老若男女をたのしませ、また時には、僻地の人びとの知らないニュースを、盲目だから見てきたわけではなくて、耳できいたことを、問われるままにつたえて、秋から冬春にかけての長い

一夜をすごすのであった。時に吹雪にでもなれば、二、三泊させてもらって、また次の村落の瞽女宿をめざしてゆく、といった遊芸の放浪者とでもよびたい女たちのことを、日本海辺に育った者は、「瞽女」とよんできた。

私は同じ日本海辺でも福井県の西端の若狭生れであるが、幼少時の冬春に、眼のつぶれた女が、三、四人つれだって荷を背負い、三味線を手にして、これも半眼つぶれた手びき女に導かれて、村へきたのを憶えている。もっとも、この瞽女は、越前か、加賀か、越後かにその住居をもっていて、福井県の端まで遊芸にきたものか、どうか詳細を知らない。

彼女たちは、村へくると、はずれの阿弥陀堂といって、わが部落では葬式の時にしかつかわない破れた古堂に泊り、一夜あけると、六十三戸の家々を門付けして廻った。戸口でお経だか、物語だか、子供にはさっぱりわからぬ、流暢な流し文句を、低声で唄い、三味線をひくものはひき、唄うものは唄いして、何がしかの包み金あるいは、茶碗一、二杯の米をもらうと、次の家の戸口へ歩いていった。もちろん、唄う女も三味線をひく女も全盲である。足もとが見えないから、前にたつ手びき女の肩に手をのばし、一人がつづくと、そのあとをまた同じように手を先の背につかえて、ならんでゆくありさまは、奇妙な「乞食さん」に思えて、いつまでも随いて廻った日の思い出が鮮やかである。

「乞食さん」と書いたが、私たちの部落では、たいした大百姓もいなかったので、血縁のない他人を家に泊め、一夜にしろ食事をめぐむといった余裕のある家はなかった。たとえば、托鉢

にくる雲水をみてさえ「乞食」がきたと子供らはふれ歩いたし、霊場めぐりの白かたびらを着た「遍路さん」をみても、「乞食さん」といった。とにかく、家の戸口に立って、ありがたい経文を唱えようが、米塩を乞うて生きる以上は、物乞いとして蔑んだ。瞽女もまた、その物乞いの一と組であった。だが、この一行は、一寸先の見えないめくらであったことと、仲間がみな、同じかたちの荷を背負い、同じかたちの瞽女笠とよばれる丸笠の、白布をまいたあご紐をかけ結び、手垢で光った細杖をつき、いつもうつむいていたことなどから、印象もふかかったのだろうと思われる。

ついでに云っておくが、物乞いの中で、もっとも、恐れられたのは、「山伏」であった。この男は、鈴のついた錫杖をつき、長髪をたらし、先のとがった帽子をかぶり、何枚かの着物をかさね着し、その上に、熊野権現だとか立山権現だとか書いた袖なし羽織を着、腰には巨大なほら貝をつるし、丸餅ほどある大きな玉の数珠を臍のあたりまでたらし、戸口に立てばポーウッポーウッとほら貝をならし、何やらわけのわからぬ呪文をとなえると、米か包み金をわたすまでは、金輪際うごかなかった。村じゅうのきらわれ者で、この男がくると、六十三戸の家は、大戸をしめて鍵をかけた。そのような荒々しい物乞いに比べると、巡礼姿ではあるが、どことなく、おとなしくて、手びき女にひかれてゆく瞽女の一行は、子供心にも哀れに思えたと思う。

瞽女には、一座があったと書いたが、遠い越後にその座をあずかる親方の家があり、時期をきめて旅へ出てゆく、ということをきいたのは、ずいぶんのちのことで、子供だった頃の瞽女

への考えと、いまの考えは多少喰いちがっている。しかし、越後の瞽女が、なぜに、若狭あたりまできたものか。のちに、越後瞽女の人たちとも会って、そのような遠出をなされたことがあったかと、訊ねてみたことがあるが、越前・若狭は汽車で通ったことはあるが、めったに門付けなどしたことはないと返事がかえってきた。すると、私がみたあの瞽女姿の女は、越後のそれでなくて、丹波か丹後あたりの瞽女だったか。いまそこのところをはっきり説明してくれる人はいない。が、部落の阿弥陀堂は、いつの年も、冬になると、そのような盲目の旅芸人が火を焚いて寝泊りしていた。雪が積って道が歩きにくければ、十日も二十日もうごかないこともあった。時には、一人ぼっちで、杖をたよりにやってくるめくら女もいた。

だから、わが部落につたわる「阿弥陀の前」という盆行事の一つに、子供らと大人が、八月十四日の宵、堂前の庭でかけあう文句に、

「阿弥陀の前になにやら光る。ごぜの眼が光る」

「兄嫁、瞽女の眼が光る、眼が光る」

「向いの山に竿さしわたす」

「先はじょじょむけ、もとしゃぐま」

「向いの山に土ふんどしゃさがる」

「廻れば間の遠さよ、間の遠さよ」

という唄が、江戸時代からうけつがれ、今日うたわれているのをみても、瞽女はわが部落の

住人と何らかのかかわりをもっていたものと思われる。

阿弥陀の前に瞽女の眼が光るといったのは、江戸時代の昔から、堂内に、めくらの女が寝泊りにきた証しだろう。わけのわからない伝承行事に参加した記憶もあるから、そう解釈しているのである。わが村を門付けして歩いた瞽女たちは、瞽女宿を提供する家などなかったため、無人の破れ堂を、区長さんに頼んで、一夜の宿にしてもらったかどうかしらない。そういえば、瞽女だけでなく、例の山伏も泊っている。葬式にしかつかわない村はずれの堂を、荒れるままに放置しておいたのも、そのような物乞いの宿として暗黙裡に提供しておいたものか。しかし、このこともあくまで私の想像であって、いずれにしても、北陸一円には、たとえ大戸をしめて一とにぎりの米さえ呉れてやろうとせぬ山伏にさえも、泊めてやる宿をつくっておく心があった。旅芸人や物乞いに、あたたかい親切をつくした人びとはいたのである。

古老のはなしに、瞽女の親子が堂にこもったまま冬をこし、春がきて親が病気になったので、村人総出で子をたすけ、米と味噌をもちよって看護にあたったそうだ。が、その甲斐もなく親が死亡すると、葬式をしてやり、遺体はさんまい谷に埋め、墓は菩提寺の無縁塚におさめた、という。そののち、瞽女の子はその親の霊を弔うために、丈六の地蔵菩薩を建立して、それは今日ものこっているそうだ。御影石の台石に、「六十六部供養塚　親の菩提の為に之を建つ享保六年辛丑　恵休」と彫字がよめる。盲目の親瞽女についていた手びき娘が、あるいは恵休という名で、旅先の部落に地蔵を寄進して立ち去ったとみてよいのだが、古老はこの恵休が、二

年ばかり、堂に住んで、経を読み、村の子に針仕事を教えたのち立ち去ったという。

話はそれてしまったが、本題にもどると、瞽女たちは、このようにして、つまり旅の途上で死亡した親をまつり、のち孤独の身を、あてどない旅にあずけて去ってゆくといったのもいたようだ。が、健全な瞽女というと妙な表現だが、根拠地に住んで、ある時期にだけ、旅して歩くといった瞽女本来の生活を頑固に守りつづけたのは、今日も残っている越後瞽女であろうか。

越後は若狭などに比べると大国で、豊穣（ほうじょう）な米穀地帯である。高田や長岡の藩主は、早くから盲の女たちに、座をつくらせ、「瞽女屋敷」なるものを認めたと文書にみえる。米穀にゆとりのあった国柄だろう。高田、長岡だけにとどまらず、越後各地の農村へゆくと、地蔵堂や阿弥陀堂を中心にして盲女組織があり、柏崎、寺泊などに近年まで語りつがれた二組の瞽女もいたそうである。

越後新井に在住の文化財調査官市川信次氏の調べによると、高田瞽女は慶長十九年高田開封（かいほう）とともに定着し、寛永元年松平光長が越前から高田へ移った時、川口御坊という者が瞽女を統率したと記録にあるそうだ。二十三人の盲女がいたとつたえられる。今日残る高田瞽女はその一と組である。

瞽女仲間の掟（おきて）によると、親方は家をもつことが条件で、家のない者には資格はなかった。親方はまた「座」をつくり、座には頭（かしら）がいて、座元になった。座元は仲間のうちで、修行の年数の長い者がなり、年齢に関係はなかったという。親方たちはつまり、そんな互助機関をもちな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com